私は貴方の妹なんです

KIA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私は貴方の妹なんです

【Ｎコード】
Ｎ４１２５ＢＡ

【作者名】
ＫＩＡ

【あらすじ】
―『黒沢如月』―母さんが旧暦名が好きな為、変な名前だがそれ以外は普通の女子高生。憧れの兄貴『黒沢皐月』が通う響藍学院に晴れて今年から通う事になった。兄貴やクラスメイトにからかわれながらも周りの濃い性格に初っ端から自分の凡人さに傷付きながらそれなりに充実な高校生活を送っていた。それが一番幸せだって知ったのはヒグラシが鳴く８月２１日の私の誕生日・・・・全てが終わって、また全てが始まった日

1節「いつもの朝」

私の名前は黒沢如月。
今年から、かの有名で人気な響藍学院に通うことになったのだ！！
もちろん・・・有名で人気だから倍率も相当あって、
兄貴である黒沢皐月にスパルタな勉強をしてもらった。

結果、見事に合格！！

とはいえ・・・学院負けな凡人学生である

「卯月姉～おっはよ～♪
ねぇねぇ、響藍の制服どうかな？似合う？似合う？？」

トントンと軽い音を立てて、まだ皺も少ない新品な暗い黄色のブレザーに
丈は膝上より上の普通の学校よりも短い紺のヒラスカート。
ブレザーの下は薄い黄色のワイシャツで、
黒チェック入りの黄色いリボンの真ん中には
響藍学院の紋章である紋章が緑のバッチに刻まれている。

「おぉ、いかにも響藍の生徒だねぇ～キサ」

リビングまで下りればカウンター越しから卯月姉が顔をのぞかせながら、
わざとらしくヒューと口笛を吹く。
この人は黒沢家の長女、黒沢卯月。

一応２１歳なんだけど、とても綺麗な顔立ちをしている。
髪はボブな明るい茶髪でいかにも「お姉さん」な人。

私達、兄妹は旧暦名から取った名前。
父さんや母さんが好きっというのもあるけど誕生月とは全然関係ない

兄貴と卯月姉は私を「キサ」と呼ぶ

「もう・・・響藍の学生だっつーの！！
って、あれ？兄貴は？」

ふとリビングの寂しさに勘づく。
それは黒沢家で一番騒がしい長男の皐月がいないからだ

「あんの馬鹿まだ寝ているの！？
本当に馬鹿だね、いんや元から馬鹿だな。
キサ、悪いけど皐月の馬鹿を起こしに行ってくれ。
姉ちゃんは今料理をして手が離せないから」

「はーい」

なぜか卯月姉はあんまり兄貴の事を好いていない。
まぁ問題ばっか起こして卯月姉が、しょっちゅう学校に御呼ばれされてるからなのかも。
なぜ母さんや父さんかじゃないかというと、
父さんはとある会社の社長で企画者でもあるから
あまり家に帰っては来ない。
母さんは元から体が弱かったけど、最近体調が悪化してばっかで、
家事は卯月姉が引き受けるって事で今は入院中。
なので卯月姉が今はお母さん的ポジション

髪に指を通しながら下りてきた階段をまた上がり、
私と卯月姉の部屋とは反対方面の廊下を駆ける。
そこが兄貴である皐月の部屋がある場所だからだ

コンコン

「兄貴ー！！」

ノックしながら呼びかけるが中から応答はない。
・・・まだ寝ているの？？
息を吸って深く吐くとまたノックをする

コンコン

「あーにーきーー！！寝てんのぉ？？？」

この様子からしたらきっとそうだろうけど念の為確認（？）と取ってみる。
だけどやっぱり反応はない。
携帯を開いて時間を見るが、これ以上寝ていたら
確実に兄貴は遅刻するよな～・・・

「兄貴ぃー入るからね～」

ゆっくりドアノブを回せばあっさり空いた。
そこにはやっぱり電気のついていない暗い部屋が視覚に広がり、
カーテンからすこしもれる光が兄貴のくるまる布団を照らす

「ほら兄貴起きろ！！起きろ！！！」

少々手荒いだろうけど肩を思いっきり揺らすが反応がない。
どんだけ爆睡してんのよぉ！！！
むっとしたからカーテンをひっつかみ全部開け光を入れると、
兄貴にまたがって重量をかけながらゆさることにした

「起きろぉお！！！！」

「ーーーーんー・・・」

さすがの兄貴もこれには唸りを上げ、
私の重量に痛みを感じたのかその重い目蓋を少し上げた。
少し見せた瞳は綺麗なアイスブルーの瞳。
母さんがハーフで多分その遺伝

「ほら兄貴、起きてよ。遅刻するよ？」

兄貴は目を腕でこするだけで起きる気配が無かったので、
とりあえず一声かけるが変わった様子はない。
返事を待つ為そのままの体勢で圧力をかけながら、
「起きろ」という念を込め睨む

「あと5分」

「日本語通じてる？？？起きろぉおおおおお！！！！！！」

「ーーーーーーーーーーーーうるっさいな」

「うぬわ！？」

いきなり兄貴は私の腕を思いっきりひっぱると、
私の視界は一瞬にして兄貴の胸板だけになった・・・
＝さっきの衝撃でこんなことになってしまったのだ

ってかちょ！！？？

「うわあああああ！！！！！
兄貴の馬鹿あああああ！！！新しい制服に早速皺ついたじゃんか！！！」

「はぁ？そんなのいつかなるだろ。
それが早いか遅いかだけだし」

私を抱き寄せた状態でタメ息をつきながら更に私を腕の力で閉じ込める。
タメ息つきたいの私なんだけど、ってか私は抱き枕じゃない

「兄貴、本当にどいて。まじで」

私まで遅刻するわ

「嫌」

「嫌じゃねぇよ」

「キサから甘えてきたじゃん」

「あのさ、あれのどこが甘えてたの？
１０文字以内で答えろや、ゴラ」

「全部」

駄目だこいつ・・・・
完全に寝ぼけているし、今にももう寝そうだよ。
せめてどうにかしようと兄貴の胸板を押し返そうとするが、
男の力に勝てるわけもなくすぐに疲れた

チラッと兄貴の部屋の時計を見れば８時３０分前
あぁ・・・本格的にやばい。
私がもう一度怒鳴ろうとした時、その衝撃な出来事が起きた

チュッ

リップ音

・・・・・・・リップ音？
目の前は胸板じゃなく兄貴の寝顔・・・・・
え、は？うっそ・・・・私のファーストキス・・・

「へ・・・・

へんたいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！」

バタン！

「どうしたのキサ！？って・・・・・
こんの馬鹿皐月ぃいいいいいい！！！！！
お前は私の可愛い妹のキサになにしとんじゃあああああああ！！！
！！」

「っさいなぁ・・・ただのおはようのキ
「キス・・・キスぅううううう！！！！！？？？？？？
お前一回表出て面かせや！！！！！！！」

卯月姉は何やら御乱心と化し、おたまを持っていない方の手で兄貴の首を猫のようにひっつかみベットから引きずり落とした

「は？ちょ、え。はぁ！！？？」

ドダンッ

案の定　兄貴は顔面から落下。
驚いた拍子で力が抜けた為私はその隙をつき脱出

「っていただ、いだい！！！こんの馬鹿姉貴！！！！！
何してんだてめぇふっざけんなよお！！！？？？」

「馬鹿はてめえええだろ！！！！
いい加減起こされないでも起きろや！！！！！」

あぁ・・・また始まってしまった。

兄貴ＶＳ卯月姉

なんでこの二人はこうも口が悪いのかなぁ・・・

「この綺麗な顔に傷でもついてみろ！！！
学校からはＤＶ被害だと思われたらどうすんだ！？」

「なーにがＤＶ被害だ、このシスコン。
つか自分で綺麗言うな、変態ナルシスト」

この一言でまた兄貴がぶちぎれて取っ組み合いとなり、
私が仲裁に入るけどしばらくやまず・・・・
喧嘩が終わったのは８時５０分だった。

これが黒沢家の１日の始まりである。

2節「初めての通学路」（前書き）

いつもの朝はやっぱり喧嘩から始まった。いつものように兄貴を起こしに行けばセクハラに合ったりして散々な目にあった（筆記・黒沢如月）

2節「初めての通学路」

「あたた……あんの雌ゴリラ、まじで手加減しなかったよ」
頭をさすりながら皐月は私の前を歩いてる。
卯月に見つかってすぐに皐月はおたまでフルぼっこをされ、
挙げ句の果てには空手技なども目の当たりにした

「兄貴の自業自得だよ～。
あれが家族じゃなかったら犯罪だよ」

新しい鞄を持ち直しながら軽く笑う。
だってそうでしょ？いきなり抱き枕にされるなんて――

あれはセクハラだ、悪く言えば痴漢

「だーかーらー！寝ぼけてたんだって！
寝息をたてるなっていう程に無理がある」

「寝息とあれは大分違うよ」

「たしかに――寝息するたびに
姉貴にあんなことされたら体が保たないわ」

わざとらしく肩もみをしつつ苦笑いをする

「というかあんなことをしなければいいんだよ」

「・・・・努力します」

皐月である兄貴の敬語は大体その反対の意味を示す。
つまりこの場合は努力をしない。
そんな自分の癖すら知らない兄貴だから思わず「ぶっ」と吹いた。

「な！？きったねーな！！！
仮にも性別上女なんだから汚い事すんじゃねー！！」

「男女平等社会でーすw」

アハハと軽く笑いながらステップで兄貴と距離を置いた・・・
はずなのに先程まで後ろに歩いていた皐月は私の隣を歩き始め私の視線と絡んだ。
その表情は先程までの調子とは違った

「なぁキサ。学校、楽しみか？」

え、いきなり？つかいきなりすぎない？？
楽しげな口調とは裏腹に、言っている言葉は不安そうだ。
一応私の兄貴だからなのか・・・心配してんのかな？

「もちろん！楽しみすぎてあまり寝れなかったんだし」

「お前ガキじゃあるまいし、一々そんなふうにするなよ（汗）」

不安そうな表情が消え呆れ顔になるがそんなの構わない。

兄貴が安心した笑みで言っていたから。
本人の前では言えないけれど私はとても兄貴こと皐月に憧れている。
それは今からわかるかもしれないが、周りに好かれて、頭も良く運動神経も良い。
そんな兄貴に憧れて、一歩でも近づこうとこの高校を選んだのだ

周りからは案の定ブラコン言われたけど（笑）

「初めてのものは人間なんでもかんでもドキドキすんの」

「俺はしなかったけど」

「んじゃ兄貴は人外」

「おま・・・その発想はないだろ」

他愛無い話をし、通学路を通るが私達しかここは通ってない。
他の事かはもう行ってしまったんだろう・・・

「別にいいじゃん」

素気ない一言を言い終わって私はとあることに気付く。
皐月を起こしたのは事実だが、朝っぱらは入学生のクラス割りで在校生の登校は１０時からとなっている。

もちろん在校生の皐月は暇なはず

「兄貴は朝から何しときわけ？」

「まぁ色々と準備があるわけよ、色々」

「ふーん？」

そのときの私は知る由も無かった。
この学校のとある制度に皐月と登校しながら話すのは小さい頃から変わらない。
ただ変わったのは通学路だけ――あとは身長差とかかな

兄貴は男性だから成長期でもあるけど、絶対に身長は１７０いっているに違いない。
そのぐらい背中が大きく見える。
末っ子というのもあるけど家族の中で一番小さいし一番凡人。

背中を見る度になぜか自分のちっぽけさを感じる。
だから――そんな自分を高校で変えたい。
皐月や卯月に負けないほど輝きたい

「おい、キサ？大丈夫か、さっからぼーっとして。
余計に馬鹿にみえっぞ？」

「馬鹿言うな！！！馬鹿を！！！
本当に兄貴はそんな事しか言えないんだからさ・・・・」

内心とは裏腹な言葉しか出ないこの口が憎いが、
そのぐらいが多分会話としては成り立っている。
私も兄貴もしんみりとした話は嫌いだし、何より娯楽とか冗談が好きだ。
卯月姉は冗談が少し苦手らしく、私達の会話を呆れながら聞いている。

「卯月姉がいたらまたやられるよ」

ゲラゲラ笑っていた兄貴だが、天敵（？）である卯月姉の名前を出せば、
嘘のように下品な笑い声が静まった。
わぁー、卯月姉効果恐るべし

「・・・・おまえ、姉貴に言うなよ？」

「ケーキで考えてあげる♪」

ウフフとわざとらしく言えば、兄貴は「はぁ！？」と眉間に皺を寄せた。
うんうん、私にだってわかっているよ。
むちゃくちゃでたらめを言っていることなんだって

「卯月姉の愛の技とケーキ、どっちが安いと思うの？？？」

「あいつのは愛の「あ」すら入ってないって・・・・
わーったよ、いつか買うよ。いつか」

「いつか！！！？？？」

いつかっていつよ！！！

私はまさかの発言に思わず立ち止り兄貴の背中を睨む。
振り返るものの兄貴は歩きながら嫌な笑みを浮かべる

「ほら、さっさと学校に行かないと？
お前、入学式早々から問題児になるつもりかァ？？」

その言葉でやっとで我に帰れば、小走りで兄貴に並んで歩く。

「本当に意地悪なんだからさー・・・」

頬を膨らませわざと拗ねたフリをすれば、兄貴が笑いながら

「すまない、すまない」と謝る気のない声音で言う。

初めて通う通学路のはずなのに、最初よりも足が軽くなった気がする

3節「高校初の迷子」（前書き）

兄貴こと皐月と通学路を歩きながら何気ない雑談をしていた・・・
だけど兄貴はなぜかその時、本当に時々だけど不安な顔をしていた

3節「高校初の迷子」

大きな門前まで来ると兄貴こと皐月は
「んじゃ、俺はここらで」となぜか足早に私とは逆方向へと走ってしまった。
とりあえず「わかった～」と兄貴の背中を見送った後、指定された教室へと向かう事にした。

１－Ｂが私の教室クラスで、１年なのになぜか教室は２階にある。
理由としては１階には図書館や事務室、職員室や食堂などが占領していて、
生徒の教室は２階からしい・・・・
そこまでわかっているから私も兄貴の背を見送った筈なのに・・・・・・・・

兄貴と別れて１０分後

「階段・・・どこ」

この学校、響藍学院ーーーーーーーーどこからともなく階段が多い！！！
一応二個ぐらい階段とか試しに上がったけど、
１－Ｂの教室らしき教室が一向に見つからない。
ちなみに私のいった階段先には資料館などといった教室とは場違いな場所である

「え、ちょ・・・階段」

もうそれしか出ない。
中央広場掲示板に展示されている地図をみても、校内が複雑すぎて意味がわからない。
そう・・・つまり、私　黒沢如月は現在「迷子」になっている

初っ端から迷子になるってわかっていたら私だって早めにでたよ！！！
なんだよ、ちくしょー・・・・
兄貴にばれたら絶対今夜の笑い話にされる。
それだけは避けたい私はとりあえず色んなところに足を運ぶ事にした。

「げっ！？あと１０分で教室に行かなきゃだのに！！！」

携帯の時計をみれば９時２０分近くだった。
プログラムでは９時３０分には自分のクラスにいって、
９時４５分にそのクラスと誘導員と一緒に体育館に移動して朝会・・・
つまり３０分までには教室につかなければいけないのだ。
つかない＝遅刻＝初日から遅刻

「うわあぁ・・・・嫌だよそんなの」

泣きそうだよ。いや、実際に泣かないけどさ！
そんな気持ちってところだよ・・・うん。

「そこで何しているんですか？」

私が迷子で嘆いていたら、後ろから声をかけられた。
凛とした声に振り向けばそこにいた人物に目を見開く。
なぜ見開いたか？
そりゃー漫画にでも出てきそうな美男子ってやつ？が目の前にいたからである

「その様子だと新入生かな？」

無表情でそう言われて無愛想にも見えるが、
見知らぬ私に声をかけてくれた時点でこの人は親切な人だ。
じーんと感動しながら頷けばその人は考え込むように顎に手をそえる

「どこのクラスかわかるでしょうか？」

「えっと・・・１－Ｂです」

「それなら職員室の近くにある階段から上がればすぐ右にあるよ」

少し金がかった茶髪のその人は、職員室があるであろう場所に指を指してくれた。
あ・・・あそこいっていない場所だ

「あ、ありがとうございます！！！」

どういたしましてと一礼下げれば、すぐに私が向かうとこと逆方向へと歩く。
結局表情を１つも変えてくれなかったなー・・・あの人。
ちょっと漫画の様な展開を望んでいた私がいた事に嫌気がさしながらも、

職員室のある場所へと足を運んだ

職員室の近くまでいくと、さっきの人の言う通り、
職員室のすぐ近くに上に上がる階段が１つだけあった。
時間も時間な為、早めに階段を駆け上がり２階の右を曲がれば、
上の方に１－Ｂと書かれた看板らしきものがぶらさがっていた

「あった！！！」

あー・・・あの人には本当感謝だよ・・・
またもや感動の波に襲われると同時に前から誰かに抱きつかれた

「如月ーー！！！！！」

「うわ！！？」

衝撃もあったため少しよろめきながらも、抱きついた本人を見下ろす。
私より少し背が低く、髪はストレートな黒髪。
そして唯一、私と一緒の中学からきた親友

「みーちゃん？」

「覚えていてくれた！？ずっと待っていたんだよ～♪」

この子の名前は庵崎（あんざき）　美恵（みえ）。
小学校から出会って中学も一緒、そして唯一高校も一緒になった私の親友。

私と兄貴は愛称「みーちゃん」と呼んでいる。

「もしかして初っ端から遅刻かと・・・」

ん？ちょっとまって・・・

「みーちゃん・・・ここ（１－Ｂ）にいるってことは、
みーちゃんも一緒のクラス！？」

みーちゃんはえへへーと言いながら愛想良い笑顔で答えれば、
先程までの感動の波が一気に失せてしまい喜びの波が上がった

「本当に！！！良かった～・・・」

そのまま抱きついたままのみーちゃんを抱きなおす

「それより如月。あたしらそろそろ入室しとかないと出席扱いされないかもよ？」

みーちゃんは自分の腕時計の時計をコツコツと指で当てながら、
それに注目してと言わんばかりに主張。
ふとみーちゃんの腕時計を見れば９時２８分。

「あと２分じゃん！！！さっさと言ってよー」

「だって如月がなんか変な風に感動していたから、つい～」

わざとらしくテへっとうざく言えば、
私はみーちゃんの腕を掴み教室へと入室していった。

でも本当に良かった―・・・
みーちゃんが一緒だし、とりあえずこの一年は乗り越えられるかな？
教室にはすでにグループになっている子もいるけど、
やっぱり大半が緊張してカタコトだったり席に座りっぱなしがいた。
みーちゃんがいるおかげで私は騒がしい方の一員だけど。
しかし私達が騒ぐ暇もなくベルが鳴れば誘導員となる教員が教室に入ってきた。

「皆さん座ってください。これから移動の説明をします」

そういえば先程まで騒がしかった人達は各々の席へ戻った。
４２人クラスで、私の出席番号は３２番。
みーちゃんは２４番で、意外に遠かった為別れがちょっとさびしかったけど、
私は自分の席へと座った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4125ba/

私は貴方の妹なんです

2012年1月14日23時49分発行